

《独立論文》

韓国における民族分断と観光

李 良 姫 ・ 福 原 裕 二

はじめに

1. 観光商品としての安保観光
2. 「安保」と「統一」の混在する安保観光
3. 安保観光の現況

終わりに

はじめに

2000年6月と2007年10月の2度に涉って、南北朝鮮首脳による会談が執り行われたものの、依然として朝鮮半島の分断状況と対峙・緊張の構図に変化はない。かかる対峙状況の構図の象徴が非武装地帯（以下、DMZ）である¹。DMZとは、文字通り「武装してはならない地帯」、つまり最も安全な地域でなければならないはずである。しかし、DMZ内での陸上における銃撃戦や軍事境界線の周辺海上における交戦は、しばしば引き起こされており、名実異にする軍事緊張の場となっている。それは通称「38度線」と呼ばれる軍事境界線が、大韓民国（以下、韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）とを隔てる「国境」の如く誤解されることがあるが、あくまで軍事境界線並びに非武装地帯の設定は、「朝鮮休戦協定」を根拠にするものであって、従って韓国と北朝鮮との関係は、朝鮮戦争の「終戦」に基づくものではないからである。とはいえ、金大中（キムデジュン）・盧武鉉（ノムヒョン）政権期のいわゆる「太陽政策」、「平和繁栄政策」が功を奏し、近年の南北関係は融和的であった。その結果として、南北の交易関係は飛躍的な発展を遂げると共に、軍事境界線を跨ぐ南北朝鮮の鉄道連結や南北経済協力の一環としての工業団地建設などが進行した。それにもかかわらず、韓国において北朝鮮は、基本的に敵対国であることには変わりがなく、それは北朝鮮においても同様であろう。

DMZは、軍事的な衝突が発生する危険な場所である一方、政治的に利用される可能性の高い地域でもある。韓国政府の思惑としては、「反共教育」の場、対北朝鮮政策の宣伝の場になりうる場所となる。韓国政府は、この地域を北朝鮮と対峙する安全保障の最前線、すなわち「安保」の場であると認識し、それに立脚した措置を行うと同時に、同民族の「統一」を象徴する場として利用する政策を行っている。こうした、「安保」と「統一」の側

面を併用した政策の代表が、「安保観光」²と呼ばれるものである。既存研究によれば、「安保観光」とは、「国家の安全保障的な側面を、観光を通じて理解させ、精神的な結束を図りつつ、統制下の中での特殊資源の観覧を通じ、観光的な楽しみを与える観光形態」であるという³。具体例を挙げるなら、「板門店（パンムンジョム）観光」のように、観光客にDMZの状況を実見させることによって、とりわけ自国民に対しては安全保障に対する意識を高めさせる観光形態のことである。韓国における「安保観光」とは、主に軍事境界線をめぐって行われており、朝鮮戦争後、韓国政府はこれを積極的に推進してきたと思われる。それでは、このような国家の思惑が介在する安保観光政策の受け手である韓国人観光客は、こうした観光をどのように受け止めているのだろうか。その効果はいかなるものなのであろうか。

安保観光の典型である「板門店観光」は、外国人観光客数が2002年現在で、年間12万人を超える人気を誇る。それに比べて、板門店を訪れる韓国人観光客は年間4万人に過ぎない。なぜなら、韓国人にとっての板門店観光とは、申請が煩雑で、様々な制約が課せられるものだからである⁴。韓国政府によれば、制約を課す理由は、北朝鮮への亡命など韓国人観光客に起こり得る問題を防止するためであるという。このことを考慮すれば、板門店観光は、主に外国人を対象に行われていると言ってよいであろう。

このように、主として外国人を対象にした板門店観光を取り上げ、人類学者として自らが参加する体験的調査を通じてこれを分析した、非常に斬新な論文にグリーンカー（Grinker）の「*The “Real Enemy” of the Nation: Exhibiting North Korea at the Demilitarized Zone*」がある⁵。グリーンカーは、板門店観光が恐怖と冒険とを組み合わせる観光商品化したものだと主張している。「DMZを訪れる外国人やDMZ周辺を訪れる韓国人観光客は、DMZがソウルの中心地からほど近いことに驚かされ、恐怖感を覚える。この恐怖感は、ツアーの興奮を高め、高額なツアー費用を正当化する」。「ツアーに使用される言葉の多くが『無人地帯』や『洗脳され攻撃的な北朝鮮人』、『敵』など挑発的である。この種の言葉は観光客を驚かせ、板門店におけるエンターテインメントの価値を高めるのに一役買っている」。さらに、グリーンカーはDMZが分断状況を示す「生きた博物館」であるとし、一般的な国立の博物館とは異なることを指摘している。すなわち、スタイナーが分類する国立博物館の2つのタイプ、すなわち「先端技術」及び「賛美された過去」のイメージを展示するという形態をDMZは無視していると指摘して、DMZは分断国家の国家概念なしでは語れず、南北朝鮮関係の緊張が観光商品としての価値を高めていると分析するのである。

確かに、グリーンカーの指摘、分析は貴重なものであると共に、先駆的な研究であると言える。ただし、韓国人にとってのDMZの意味、捉え方は独特であることを考慮するならば、その研究によって板門店観光やひいては安保観光の全体像が捉えられているとは言い難い。韓国政府の思惑が直截的に影響を及ぼすと考えられる韓国人観光客を対象にした安

保観光の研究や韓国人の手になる安保観光の研究は、ほぼ皆無に等しいのである。

ところで、板門店は韓国人にとって、訪問に伴う制約が多いことから、韓国政府は板門店以外の DMZ 周辺の観光開発も積極的に行っている。例えば、現在北朝鮮地域に所在する金剛山（クムガンサン）が観光開放される以前から、鉄原（チョルウォン）、東草（ソクチョ）など DMZ 周辺への観光、北朝鮮が韓国へ侵入するために掘ったとされる地下トンネル体験ツアー、北朝鮮が遠望できる統一展望台などを観光地として開発してきた。これらのツアーの対象は多くが韓国人であり、韓国政府や韓国軍の後援の他、地方自治体により積極的に観光が進められている。

なお、安保観光が韓国において定立している背景には、グリーンカーが指摘することの他に、韓国人の「統一」に含意された特異な感情を挙げることができよう。韓国人にとって統一とは、朝鮮半島における民族の分断、国家の分裂の悲劇を思い起こさせる言葉として概念化されたものである。2つに分断された民族が1つになること、つまり北朝鮮と合一し、一つの国家を形成するという悲願がその言葉には込められている。しかし、「統一」に及ぶ方法論や概念は、歴代政権の対内政策や朝鮮半島をめぐる国際情勢によって変遷を繰り返してきた。韓国の『統一白書』が率直に記述するように、「朝鮮戦争直後、李承晩大統領は、当時北朝鮮の南侵により深刻な被害を受けた国民の情緒を勘案し、『武力北進統一』を主張した」⁶。すなわち、李承晩（イスンマン）政権期における「統一」とは、国民統合のイデオロギー的な手段としての反共主義に基づく、北朝鮮に対して攻勢を図るための概念であった。その後の朴正熙（パクチョンヒ）政権期においては、韓国の経済的近代化を推し進めることに主力を注ぐ「先建設・後統一」のスローガンが掲げられた。従って、この場合の「統一」とは、北朝鮮に対して攻勢を強めるための理念的な概念であるとともに、実現性を喪失したがゆえにより当為性を強くまとった概念に転化していったと言えよう。しかし、1980年代の全斗煥（チョンドゥファン）政権期、盧泰愚（ノテウ）政権期においては、高度の経済成長による様々な側面での南北朝鮮間の非対称性の顕在化や、韓国国内における民主化の高まりと達成による反共主義の呪縛からの解放によって、「統一」は同伴者に対して自律的な働きかけを行う当為の概念へと変化した。その後、冷戦の崩壊という国際環境の変転、南北朝鮮間の正統性争いを中心とする国際的地位競争の事実上の終結という時代的な変化を通じて、「統一」は現実原理として試され、考察される概念へと昇華している。

小論は、以上のような問題意識を共有する韓国人の観光学者と日本人の韓国地域研究者が共同で行う安保観光の実態分析である。その研究目的を敷衍すれば、韓国政府の政策によって施行されている安保観光地とはどのようなものでそこを訪れる観光客はこれをどのように受け止め、その効果はいかなるものであるのかを文献と現地調査を踏まえながら明らかにすることである。

1. 観光商品としての安保観光

現在、韓国において南北朝鮮の分断状況を利用した主な「観光商品」としては、板門店観光、DMZ 観光、朝鮮戦争の戦跡地をめぐる観光などが存在する。そのほとんどすべてが DMZ 周辺の地域を訪れる観光形態を取っている。DMZ は先述したように、Demilitarized Zone の頭文字で、1953年7月の朝鮮休戦協定をその設定の根拠とし、「軍事境界線」を基準に互いに南と北に2キロメートル下がった地域の総称である⁷。この地域の南側は国連軍司令部の管轄であり、韓国に駐屯する国連軍の許可を得なければ立ち入ることができない。しかし、DMZ 内で唯一出入りの許されている場所がある。それが板門店である。ただし、この板門店も一般の韓国人にとっては立ち入ることが大変難しいところである。事実、「DMZ は確かに国境である。しかし、そこは国境ではなかった。国境は文化の交差点である。双方の文化が相互交流する属性を持っている。しかし、DMZ にはこのような現象が現れない。そこには交流するものはなにもない」⁸、と韓国人によって評される。

DMZ 観光とは、軍事境界線を中心とした周辺地域に、自然に、あるいは人為的に作られた観光地をめぐる形態のことである。板門店を除き DMZ 内で観光のために出入りできる場所は存在しないから、DMZ 観光とは DMZ を訪れるものではなく、その周辺から DMZ の現況や北朝鮮を垣間見るものであると言える。

軍事境界線から南側へ下がった2キロメートル地点が「南方限界線」である。この地点に鉄柵が張り巡らされ、ここを韓国軍が警備している。韓国や日本のメディアでは、分断状況を象徴する場として鉄柵を兵士が見回る映像がしばしば放映されるが、ここからさらに南へ下がった地点に「民間人統制区域」がある。民間人統制区域は、「非武装地帯南方限界線より5～20キロメートル外に民間人統制線が設定されており、民間人統制線から南方限界線までの地域」であるとされ、「休戦ライン一帯の軍作戦及び軍事施設保護と保安維持目的で民間人の出入りを制限する区域」だと説明される⁹。さらに、「休戦協定により設けられ、軍隊の駐屯や武器の配置、軍事施設の設置が禁止されている非武装地帯とは区分される」重武装地域である¹⁰。従って、「DMZ の警備兵は拳銃と自動小銃しか携行できないが、その外側にいる両軍は、それぞれが半島全体を破滅させるほどの火力を持つ武器を装備している。生物・化学兵器や核兵器を保有している可能性のある北朝鮮は、韓国の首都ソウルに大砲500門の照準を合わせている」と主張されるのである¹¹。つまり、民間人統制区域は、最新の武器で武装した軍人が存在し、戦争が起きた場合には最も早く戦場になる場所なのである。この地域内での観光が主な安保観光であり、分断状況を利用した観光であると言える。

この民間人統制区域を設定する根拠の「民間人統制線」は、朝鮮休戦協定調印後に軍事境界線の維持を担当していた、アメリカ陸軍第8軍団司令官により1954年2月に設定された。その後、1958年に韓国軍がその地域の警備を担当することになり、軍の作戦や保安上

支障がない範囲内で「出入農業」と、「入居農業」が許可された。この地域内には、政府により「統一村」が作られて観光地化しているところもある。1990年代以前までは、この区域への出入りが厳しく統制されていた。しかし、文民政権が誕生して以降、徐々にこの地域への出入りは緩和され、また、民間人統制区域自体も年々縮小している状況にあり、これに伴って観光地化が拡大していつている。もちろん、これらの地域での観光は、北朝鮮を身近に垣間見ることはできても、北朝鮮の地を踏むことはできない。それゆえ、こうした DMZ 周辺観光は観光客により北朝鮮を身近に体感したい、DMZ を超えたいという願望を抱かせることに貢献する。こうした願望を叶えたのが金剛山観光である。金剛山観光は、DMZ 観光の延長線上に位置する観光として捉えることができよう。

主な安保観光地とその観光客数は、下表の通りである [表 1]。

[表 1] 安保観光地観光客動向

単位：名

区 分	2007			2006			2005		
	小 計	韓国人	外国人	小 計	韓国人	外国人	小 計	韓国人	外国人
計 (名)	2,252,765	2,143,333	109,432	2,312,340	2,008,092	304,248	2,377,822	2,102,044	275,778
高城統一展望台							634,840	630,367	4,473
都羅展望台／ トンネル 3 号	278,111	179,100	99,011	363,087	297,258	65,829	377,064	330,883	46,181
鍵展望台	30,343	30,181	162	22,834	22,659	175	14,257	14,210	47
鰲頭山展望台				594,317	380,818	213,499	646,282	435,157	211,125
白馬戦跡地	123,420	122,980	440	165,000	164,500	500	100,869	100,168	701
カンルン統一公園				58,066	47,172	10,894			
労働党舎／ 鉄の三角戦跡館／ トンネル 2 号／ 月井里展望台	533,222	528,222	5,000	413,213	409,713	3,500	222,484	211,250	11,234
乙地展望台／ トンネル 4 号	131,569	131,162	407	67,371	60,634	6,737	77,724	77,336	388
台風展望台	51,076	51,049	27	55,114	54,773	341	57,679	57,283	396
西海交戦戦跡碑	20,779	20,604	175	20,779	20,604	175	22,376	22,217	159
エギ峰	174,724	173,544	1,180	174,724	173,544	1,180	191,566	190,564	1,002
七星展望台	985	921	64				871	807	64
上昇展望台	5,778	5,596	182						
勝利展望台	476,800	475,741	1,059				26,223	26,215	8
勝戦展望台	2,760	2,400	360				5,587	5,587	0
陸軍博物館	68,098	67,894	204						
陸・空・海軍 士官学校	251,859	251,209	650	274,594	273,687	907			
浦港歴史館	103,241	102,730	511	103,241	102,730	511			

出所：文化観光部『観光動向に関する年次報告書』（2005年度～2007年度版）文化観光部、2005年～2007年に記載の数値を基に筆者が作成。

[表1] から明らかなおり、毎年200万人を超える観光客が安保観光地を訪れている。最も多くの集客を行っている観光地は「高城(コソン)展望台」である。高城展望台は、韓国東海岸最北端に位置しており、北朝鮮地域に位置する金剛山を見渡すことができるとして大変な人気がある。1983年に建設され、北朝鮮地域出身者や離散家族には故郷や親類を偲ぶ場として利用されてきた。1998年に海路による金剛山観光が実現してからも、高城展望台を訪れる観光客は多い。ここでは、毎年200万人を超える観光客が安保観光地を訪れるという事実は、韓国において安保観光が定着していることを意味するものとして押さえておきたい。

2. 「安保」と「統一」の混在する安保観光

(1) 安保観光の「安保」教育的側面

反資本主義の喧伝が、『労働新聞』など各種メディアを通じて、北朝鮮において盛んであることは周知の通りである。この喧伝が敵対的な存在に対する警戒心の高揚を目的に行われていることは論を俟たない。こうした状況は冷戦下の韓国においても同様であった。韓国政府は様々な手段を用いて反共主義を広報、教育を通じて喧伝してきた¹²。近年においてもこの名残は散見される。韓国軍は北朝鮮との和解ムードの状況下で、それに対する危機意識を国民が喪失してしまうことに懸念を覚えているものと推察される。南北朝鮮初の首脳会談が行われた2000年の『国防白書』の「発刊の辞」には以下の内容が記されている。「南北関係の発展は、わが軍が確固たる国防体制を整えていたからこそ可能であったと確信しています。その際に重要なことは、これから南北関係が進展すればするほど、確固たる安保がより切実に要求されるという事実です。すなわち、南北関係と安保環境がどのように変化するにかかわらず、わが領土と領空、領海を侵入するいかなる外部の脅威も撃退し、国民の生命と財産を保護するというわが軍の基本任務と使命にはいささかの变化もないということです」¹³。韓国軍の安全保障に対する基本姿勢は、南北関係の変化に影響されないのみならず、南北関係が変化すればするほど、国防意識を強めねばならないと主張しているのである。

これに歩調を合わせるが如く、韓国国防部は軍の管理下にある施設を積極的に開放し、国民の安全保障意識の高揚を図る活動を進めている。その代表的な活動例が「休戦ライン鉄柵歩き」と呼ばれるものである。これは南方限界線に張り巡らされている鉄柵に沿って、一般人が軍の説明を受けつつ散策するという安保観光の一種である。従来は展望台などから肉眼や遠望鏡を用いて眺めることしかできなかったのが、鉄柵のそばを歩くことにより、対峙状況の緊張感やより北朝鮮を身近に体感したいと願う観光客をひきつける魅力的な観光形態として登場した。観光の実状としては、北朝鮮地域に位置する金剛山が観光可能となった現在、遠くから北朝鮮を眺めるだけでは観光客の欲求を満たすことができなくなったという背景があるものと思われる。だがそれはともあれ、安全保障の意識を高めるのに

最も効果的であると見なしているがゆえに、国防部は全面的な協力を行いこの観光を進めているのであろう。韓国国防部ではこの他にも、板門店や DMZ、地下トンネルを題材とした映画を製作し、これを上映することで人々の安全保障に対する意識を高めようと努力している。

上述したように、ほとんどの安保観光地は未だ民間人統制区域内にあり、当然ながらその大部分は軍の管理下にある。従って、多くの観光地では兵士が観光客に案内や説明を施す。例えば、第4地下トンネルでは、駐車場に兵士が待機しており、到着するやいなや兵士に伴われて「安保教育館」と表示された施設に観光客は案内される。そこで、北朝鮮が韓国を侵略するために掘られたとされる地下トンネルについてのビデオを約15分間見せられ、観光客はいやが上にも危機意識を植え付けられる。また、第2トンネルの入口近くには、トンネル探索中に亡くなった韓国人兵士の慰霊塔が建てられており、その碑文には地下トンネルを掘削し侵略を試みようとした北朝鮮に対する警戒心の必要性と国家への忠誠心が強調されている。ちなみに、第4トンネルには、トンネル探索中に不慮の事故で死亡した「忠犬之墓」と石碑が建てられており、犬の忠誠心まで称えられている。その他にもこうした安保観光地には、朝鮮戦争の戦跡碑や慰霊碑など国家への忠誠心を訴える記念碑や記念館が数多く存在している。安保観光地を訪れる観光客は、一々そうした場所を訪れなければならない。

ところで、DMZ や北朝鮮が遠望できる展望台では、しばしば兵士と郡職員による案内、説明が行われる。筆者が見る限り、郡職員が行う説明の際には、観光客は緊張感もなく、集中して聞いていないことが多い。一方、兵士が説明する段になると、皆が整然と集まり、緊張感を持って集中して聞いているようであった。同じ安保観光地であるとはいえ、郡職員と軍人とはその場の緊迫感が異なり、軍事的な対峙現況や背景説明、注意・遵守事項の説明の受け入れ態度が全く相違しているように思われた。それは一般人である郡職員は恐れる存在ではないが、日常的に武器を携行しており（案内する際には武器を携行することはないが）、民間人とは異なる気迫を持つ軍人に対しては、知らず知らずのうちに畏敬の念が醸成されるからであろう。これは見方を変えれば、軍人による案内、説明は観光客に対して安保観光地を設定した者の意図を浸透させることにおいて非常に効果的であることを意味するものと考えられる。そうであるとするならば、互いに和解や協力の実践を試行しつつ、いつ緊迫した状況に陥るか予断を許さない南北朝鮮関係においては、国民の安全保障に対する高揚した意識を維持する必要がある、その際に安保観光地は韓国国民に緊張感を想起させるのに必要な場になっていると考えられる。このことと DMZ 近くで長年居住し、安保観光地のほとんどを訪れたという人物の語り「西部戦線から東部戦線に至る地域を訪れて心に残る文句は、平和な時こそ戦争に備えなさい、という文句である」を照らし合わせれば¹⁴、安保観光地が韓国軍ひいては韓国政府の意向により設定され、上述した韓国軍の安全保障に対する基本姿勢を意図して観光が施行されているという構図が透け

て見えてくるであろう。

さらに、これと関連して興味深いのは、民間人統制区域にある地下トンネルや展望台などで、軍人が観光客に写真撮影禁止などの注意を細々と行うことである。金剛山観光でも、バスの中から村の状況や住民を撮影してはならないと注意を受けるが、韓国内の展望台からも北朝鮮に向けて写真撮影を行ったり、むやみにカメラを向けたりしてはならないと注意を受けるときがある。そこは軍事的に重要な要所であり、軍事施設が多く存在するからであるという。しかし、民間人統制区域を積極的に開放し、地下トンネルなどを安保観光に利用しているのは韓国軍であり、政府である。特殊な機能を備えたカメラであるならばいざ知らず、市販のカメラに対して一々注意を与えるのは理解に苦しむ¹⁵。写真撮影を禁止することにもそこが安全保障上の特殊な場であり、緊張感を醸し出すのに有用であることを見越した意図が見られるのである。

以上、安保観光は、国防意識を高める「安保」教育の場として価値が高いということを韓国政府は認識し、観光というエンターテインメントを通じそれを遂行することに利用されていると言えよう。文民政権以降、北朝鮮に対し融和的な統一観が国民の間に醸成され、敵対の中の同伴として模索される統一が現実化する現在の韓国であればこそ、こうした安保観光は重要な役割を果たしているのだと思われる。

(2) 統一教育の目的とその実態：安保観光の「統一」教育的側面

韓国統一部は、『統一教育基本指針書』（以下、指針書）の中で「現場教育における統一教育の実施要領と意義」について述べ、「学習者が見学する活動距離を開発し、踏査できる場所を物色するなどの努力を通じて、統一教育の質を高めることができる。例えば、統一展望台、戦争記念館、臨津閣、地下トンネル、鉄の三角戦跡地、金剛山、軍部隊などに関する現場見学を拡大することにより、分断の苦痛を経験し、統一意識を高める」としている¹⁶。指針書の言葉通りに受け取れば、実見を通じて統一意識の涵養を図ることが統一部の目標のようである。しかし、のちに紹介するように、統一教育における韓国政府の目論見はさらに踏み込んだ点にあるように思われる。なぜなら、1999年2月に制定された「統一教育支援法」（以下、支援法）では統一意識の内容に関してさらに明確な意図を盛り込んでいるからである。

金剛山観光が実現し、統一への期待感が韓国国民の中に拡大されはじめた1999年にこの支援法が制定された意義は大きい。大統領令で施行されたこの法律は、「統一教育を促進し、支援するにあたり必要な事項を規定することを目的とする」¹⁷。その際、「この法で『統一教育』というのは、国民に自由民主主義に対する信念と民族共同体意識及び健全な安保観をもとにした統一を可能とするために必要な価値観と態度の涵養を目的とする諸教育をいう」と定義しているのである¹⁸。つまり、没価値的な単なる統一志向の醸成ではなく、自由民主主義という価値観を持った韓国主導での統一が前提視され、そのための明確な共同

体意識と安全保障観を内包した統一意識の高揚でなければならないということである。ある特定の価値意識の涵養とそのための安全保障意識の重要性を強調しているのである。

こうした、学生を中心対象に行った統一教育の結果としては、一定の成果がうかがえる。2003年2月に「京畿道（キョンギド）観光公社」が主催し、統一部と国防部が支援した「大学生 DMZ 体験ツアー」の感想文は、統一を祈願する文章が多く掲載されており、分断状況を改めて自覚することで、「我々が力をつけないといけない」、「同胞愛を持った真の強者」などといった自律的な共同体意識の醸成において成果があったと言える。DMZ を訪れ、緊迫する分断状況を実感したこと、また早く統一して自由に北朝鮮を往来したいという念願が感想文からは読みとれる¹⁹。こうした安保観光地を訪れた後の統一に対する熱望は学生に限らず、一般市民にも普遍的であることが、筆者が独自に行ったインタビュー結果からも明らかとなる。

筆者は、2003年に安保観光地を訪れた観光客を対象に、DMZ 観光の感想と観光後の北朝鮮に対するイメージ変化を問うインタビューを行った。その結果、観光以前と観光以後とでは北朝鮮に対するイメージの変化が見られるということが判明した。観光動機としては、北朝鮮に関心があり、より身近で北朝鮮を見てみたいという声が多数であった。すなわち、観光以前は単なる興味の対象として見ていた北朝鮮という存在であったが、観光以後は同じ民族であることを改めて認識し、兎にも角にも統一しなければならないとする回答が多く見られるのである²⁰。このことから言えば、安保観光は指針書という没価値的な統一意識の醸成、つまり北朝鮮が同じ民族であることを再認識し、統一への期待感を高めることには成功していると言える。このことは、筆者が別途行った海路での金剛山観光の際のインタビュー結果とも符合するものであった。しかし、筆者が同様にして行った陸路での金剛山観光の際のインタビューでは、北朝鮮の人々に対して同じ民族であることを認識したという回答よりは、体制が異なる、生活が異なるなどの異質性を感じたという回答が多かった²¹。DMZ 周辺観光と海路での金剛山観光では、同じ民族であることを認識し、これを通じて統一への期待感を強めるのに対して、陸路での金剛山観光では、むしろ異質性の認識が形成される。その違いは、可視される「軍事境界線」を越えるか、越えない観光形態の相違ではないかと思われる。つまり、軍事境界線を越えることによって、韓国人は北朝鮮の人々や社会に対して、同民族としての意識よりは別世界としての異質性を感じ取るのだと考えられる。それはともあれ、安保観光は統一意識の涵養という「統一」教育的側面を内包していると言えよう。つまり、韓国政府の施策として行われている安保観光は、「安保」と「統一」教育の混在する観光なのである。

3. 安保観光の現況

(1) 板門店観光

上掲した「表1」に見られるように、板門店に限っては外国人観光客の数の方が韓国人

観光客数を上回る。それは、DMZ 周辺にあるほとんどの安保観光地がその日に申請、その日に観光が可能であるのに対して、韓国人が板門店を観光することは非常に煩雑だからである。実際に、筆者も板門店観光を扱っている旅行社や国家情報院などに問い合わせるなど板門店訪問の方法を模索してみたが結局断念するしかなかった。上述した長期に渉る申請に加えて、30人以上の団体で申し込まなければならず、個人での訪問はほぼ不可能だったのである²²。

そもそも板門店観光は、1964年に韓国人観光客が北朝鮮に亡命したという記録があることから²³、1960年代には既に開始されていたことが明らかである。その後、1976年のいわゆる「ポプラ事件」などの様々な事件や南北間の対話の場所として利用されたことにより、板門店は注目されるようになるが、板門店観光を一躍有名にしたのは映画「JSA」であろう。JSA は「共同警備区域」の頭文字で、この映画は、板門店を警備する韓国軍と北朝鮮軍との友情と葛藤を描いた作品である。「JSA」は日本でも公開され、それに乗じて日本人の板門店観光への関心も高まってきた。「JSA」は、1997年に出版された『DMZ』²⁴という小説を映画化したものであるとされるが、実際には小説や映画のように両軍の兵士が気軽に言葉を交わしたり、交流できたりはしない。ただし、次のような事例の如く、JSA 内で韓国軍と北朝鮮軍との物品のやり取りが行われていたことは明らかである²⁵。すなわち、1998年2月に板門店を警備していた金中尉という軍人が死亡した事件があった。これを韓国国防省が調査した結果、「1996年と1997年の間にかけて、韓国軍の一部が北傀²⁶と会話し、物品を受け取ったことが判明して、これに関わる24名を摘発した。それらのうち、軍事境界線上で30回もの接触を行い、29点の物品を受け取った金中士²⁷を、国家保安法違反などで起訴した」。この報告書では、事件概要に加えて「このような対北接触は、北傀軍と対面勤務する板門店の勤務条件と好奇心から生まれたものであり、北傀軍に包摂された事例はない」としている。北朝鮮軍への包摂事実関係はともかくとして、「JSA」のように北朝鮮軍への好奇心からこれとの接触があったのは確かである。そうした意外性に加えて、イデオロギーの異質性、民族感情やアクションがあり、この映画によって板門店は、韓国人はもちろんのこと、日本人とっても興味深いものになったと言える。

(2) 臨津閣観光

臨津閣（イムジンガク）は朝鮮戦争後、離散家族らの再会への強い想いの念を癒す場として有名になった。臨津閣内には、「臨津江地区戦跡碑」が建立されており、この碑の建設由来は、「韓国戦争当時の激戦地域である臨津江地区に戦跡地を開発することによって、国家安保意識を固め、反共教育の生の資料、健全な観光資源として活用することにある」とされている²⁸。従来、臨津閣は一般の韓国人や観光客らが何の制限もなく通行可能な韓国最北端にあり、とりわけ北朝鮮出身者や離散家族らが望郷の念、再会を偲ぶ場として利用されてきた。その実、望拝壇は北朝鮮が故郷である人々のために1985年韓国政府により

建てられた。その他にもミャンマーで北朝鮮のテロにより死亡した17名の慰霊碑、アメリカ軍参戦碑などがある一方で、統一池、平和の鐘などが存在する。従来の利用状況と戦跡碑の建設由来が乖離しているように、統一を念願させる施設がある一方で、北朝鮮を敵視するような記念碑が混在しているところに、臨津閣の特質があると言えよう。言い換えれば、「安保」と「統一」の醸成ツールが混在しているのが臨津閣である。

ところで、臨津閣の一つの見所である自由の橋は、永く渡ることができなかったが、2000年以降新たに補修がなされ、観光客が橋の上を歩けるようになった。この自由の橋に設けられている鉄条網には、南北統一を祈願する口号が各所に掲げられている。その他、この周辺には平和の鐘や平和の石、平和の池などといった新たな観光施設が整備されていっている。その上、従来の安保観光地とは趣の異なる遊園地のような娯楽施設も作られたりしている。かつて、韓国人にとって北朝鮮をもっとも身近に眺めることができた最北端の場は、民間人統制区域内まで観光することが可能になり、変化を迫られるに至っている。臨津閣はもう神秘的な存在でも、望郷の場でもなく、単純に観光をするために訪れる場所に過ぎなくなっているように思われる。ちなみに、臨津閣は民間人統制区域の入口に過ぎず、そこから軍事境界線まではかなりの距離があるにもかかわらず、臨津閣から見える山河が北朝鮮地域であると勘違いする観光客が多かった。しかし、民間人統制区域内にまで立ち入ることが許され、DMZ 近くまで観光できるようになった現在はそのような勘違いもなくなり、臨津閣から見える風景も大きな意味を持たなくなったと思われる。

(3) 戦争記念館

DMZ 周辺地域に所在するものではないが、戦争記念館は「安保」教育の側面が突出した安保観光地として特筆すべき場所である。1994年に開館したその建設目的は「護国資料の収集・保存及び展示、戦争の教訓と護国精神を学ぶ教育の場、勇士の護国偉勲を記念し、追悼する」こととされている²⁹。この戦争記念館は、修学旅行や社会見学などで多くの学生が訪れることでつとに知られる。朝鮮戦争休戦協定締結50周年を翌年に控えた2002年には、特に企画展示として DMZ や板門店の実物模型が配され、DMZ や板門店を訪れることが比較的困難な自国民に対して類似体験ができるよう工夫された。

1989年に戦争記念館を建設する計画が当時の大統領や政府によって立てられた時、国民の間では反対の意見もあった。それは、朝鮮戦争という民族の悲劇を展示することに対する拒否感情からであった。もちろん、民族の悲劇ということ言えば、韓国にはすでに日本に対する義兵の活躍や植民地朝鮮の時代を中心的に展示する独立記念館が存在しているが、それを建てる時は反対の声はあがらなかった。そこに、抗日闘争と朝鮮戦争の認識の差がある。

戦争記念館の敷地内には、朝鮮戦争当時の装備と激戦の様子、また現在の韓国軍が保有する最先端の武器が展示されている。これは現状の韓国の軍事力を誇示する一方で、「戦

争の記憶の場合であれば、敵対の構図もそのまま保存されてしまうことになる」³⁰ ように、朝鮮戦争という戦争の記憶を保存展示することによって、北朝鮮との敵対構図を観覧者に再認識させる意図が含まれているものと思われる。それに加えて、自国が被った戦争の執拗な展示や五感に訴える形の戦争疑似体験ブースなどの存在は、「戦争博物館は、戦争を忘れないようにすることで戦争の再発を防ぐためのものと考えられている」³¹ ことを一歩進めて、だからこそ安保が重要であるということを主張しているように思える。

(4) 新たな安保観光の開発

① 都羅山駅連携安保観光ツアー

韓国政府や地方自治体、その後援を受けた民間旅行会社の連携による、分断状況を利用した安保観光は常に開発され続けている。無論こうした安保観光も「安保」と「統一」の教材が混在する仕組みが整っている。そうした安保観光の中でもっとも多く観光客を集めているのが坡州（パジュ）市が運営している「都羅山（トラサン）駅連携安保観光ツアー」である。その概要は、臨津閣－都羅山駅－都羅展望台－第3トンネル－統一村という民間人統制区域を大幅に観光ルートに組み込んだもので、地方自治体が関連軍部隊や退役軍人会と連携し施行しているものである。もちろん、「国防부는2002年4月4日、都羅駅一帯を世界的安保観光団地に開発すると国家安全保障会議の決定により、来月から本格的な工事を行うことにした。これに先立ち11日、都羅駅開通とともに休戦以降49年ぶりに民間人統制区域に観光列車を運行すると発表した」ように³²、国防部の後援も受けている。

この安保観光は、個人で参加するにせよ、必ずバスに分乗して団体で観光する形態が特徴的である。臨津閣を出発すると、程なく都羅山駅に到着する。その過程では、都羅山駅から第3トンネルに至るバスの中では写真撮影が禁止であることを運転手からガイドされる。道の端々には「地雷」と書かれた標柱が立ち、民間人統制区域は改めて危険の場所であることが想起され、緊張感を味わうことになる。都羅駅構内では、写真撮影が可能であるが、北朝鮮地域へ向けてカメラを向けることは厳しく制限される。

観光中途のバスの中では、運転手が説明を行い、説明を終えるにあたってはその都度「軍事保護地域での注意点は、ビデオカメラ撮影は全面禁止であり、写真は指定された場所のみにて撮影可能で、違反した場合はフィルムを没収する」と注意が喚起される。都羅展望台からの撮影においても、遠望鏡が設置されているところから約3メートル離れた場所からしか北朝鮮地域へ向けて撮影することはできない。そこにはポートラインが設けられており、兵士が監視している。その周辺を散策すれば、道路には「西部戦線異常なし」という口号がしばしば目に留まり、韓国軍がその地域を厳重に守護している様子が伺われる。その後、統一村の説明で「統一村は元来、米軍部隊が駐屯していたが、部隊が北朝鮮から近いこともあって、北朝鮮軍により米兵が殺害されることもあった。こうして米軍部隊は

移住し、その代わりに退役軍人などで構成された統一村ができた」という背景が印象的に語られる。

都羅山駅連携安保観光ツアーは、従来一般の韓国人が立ち入り困難な民間人統制区域を大幅に観光ルートに取り入れていることから人気を博しているが、繰り返し行う写真撮影の注意喚起にせよ、しばしば目に留まる非日常的な口号にせよ、運転手（退役軍人）の案内説明にせよ、観光客に対してそこが分断と対峙の特殊な場であるとの意識形成へ向かって収斂しているように思える。まさに、「分断の苦痛を経験し、統一意識を高める」（指針書）という統一教育と軌を一にしている安保観光地であると言えよう。

② 脱北者を利用した安保観光

2002年3月、「脱北同胞と共にする非武装地帯観光」と銘打った安保観光が新たに登場した。既存の資源を活用し、これを開発することで安保観光を形成した事例は数多いが、新たに南北間で発生した現象を利用して安保観光に仕立てるツアーはこれが初めてであると思われる。最後にこの新たな安保観光形態の概要と特徴を紹介しておこう。

この観光は、板門店観光を専門的に扱う「板門店トラベル社」が行なっている民間主催の安保観光である。もちろん、この観光の旅行社の代表が「昨年5月、国家情報院と統一部の推薦を依頼、均衡感覚を持った脱北者5名の推薦を受けた」と述べる如く³³。韓国政府がこれを後援している。観光対象者は、韓国人と外国人（主に日本人）であるが、費用が割高なのと脱北者の発生以降、様々なメディアでその証言や北朝鮮の実情が韓国国内においては洪水のようにあふれ出ている状況を反映して、韓国人の参加者は少ない。

従って、外国人、主に日本人観光客が大半のこの観光であるが、日本人が脱北者に対して最も興味を抱いている部分は、彼らのかつての北朝鮮での生活と現在の生活とのギャップのようである。メディアにおいて様々な形で語られる北朝鮮の社会の実相がどのようなものなのかを確認したいということらしい。筆者はこの観光に参加して、参加動機や観光後の感想などについてインタビューを実施した。インタビューの結果から、高度に情報が隠蔽・統制されている社会に対する好奇心から、この観光に参加したという動機が覗える。その上、日本でも盛んに取り上げられている拉致問題や脱北者問題などを契機に北朝鮮に対する好奇心が高まったものと思われる。言い換えれば、日本では決して想像だにできない現実を体感したいということであろう。さらに、観光を通じて観光客は、民間人統制区域やDMZが内包する緊迫感や異様な雰囲気を感じて取っているようであった³⁴。

事実、「板門店トラベル社」が2002年8月に外国人観光客500名を対象として行ったアンケートでもこのことは示唆される。「板門店と非武装地帯を訪れた理由」について問うた設問では、「世界で唯一残されている緊張と対立の現場体験を行いたい」、「南北間の対峙の場を体験したい」とする回答が各々27%でもっとも多い³⁵。このことは、非日常体験を板門店観光やDMZ観光を通じて行いたいとする参加動機を物語たるものであろう。また、同じアンケートの「韓国というと、真っ先に連想することは何ですか」という設問に対し

でも、「民族分断の悲劇」、「韓国人の統一への念願」がもっとも多く回答された。つまり、観光客は分断状況に置かれている韓国という特殊な存在を想起し、そこで繰り返らされている非日常的な現象を垣間見て、その異質感と緊張感を体感して満足するのである。

また、この観光において興味深いのは、参加者募集のためのパンフレット表現の相違である。パンフレットには韓国語表記のものと日本語表記のものがあるが、観光名称からしてそもそも異なっている。韓国語表記のパンフレットでは、「脱北同胞と共にする非武装地帯観光」となっているが、一方日本語表記のパンフレットでは、「北朝鮮亡命者との非武装地帯観光」となっている。一般に日本で「脱北者」と呼ばれる存在に対する呼称については、日本と韓国では異なるため、「脱北同胞」と「北朝鮮亡命者」という名称が使分けられているのは理解できる。だが、案内文に至ると、韓国語表記のパンフレットでは、「非武装地帯観光に北朝鮮の話が追加された新たな安保観光プログラム」となっており、日本語表記のパンフレットでは、「衝撃！もどかしい！信じられない。北朝鮮亡命者による悲惨な北朝鮮の生活の証言」となっている。つまり、韓国人向けのパンフレットでは、安保観光プログラムであることが全面に押し出されているのである。統一教育をはじめとする安保観光が韓国において浸透していることの証左であろう。

ところで、この観光の特徴は、脱北者が同行して案内役を務めることの他に、韓国の東海岸をめぐるコース設定がある。韓国の東海岸は、北朝鮮の工作船やスパイが侵入するルートとして知られている場所でもあるため、海岸沿いには鉄柵が張り巡らされている。実際に、既存研究において「朝鮮戦争後、北朝鮮からの工作員や工作船の侵入事件は数百件にも及ぶ」と述べられるように³⁶、とりわけ海岸線を対象とした工作船による工作員の侵入は非常に多い。冷戦終結以降、DMZ内での陸上における銃撃戦や軍事境界線の周辺海上における交戦・工作船による工作員の侵入は減少傾向にあるものの、その中でもっとも最近で大規模な東海岸における北朝鮮からの武装工作員の侵入は、1996年9月16日に発見された北朝鮮潜水艦侵入事件がある。潜水艦を用いて侵入した北朝鮮の工作員は、その座礁により潜水艦に放火し、海岸沿いにある鉄柵を越えて脱出したが、民間人によってその存在と潜水艦が発見され、北朝鮮工作員の25名が死亡、1名が捕まり、韓国側も軍人11名と民間人6名の死亡者を出す痛ましい事件であった。この潜水艦が発見された場所に「統一公園」が作られており、観光コースに含まれている。統一公園造成の趣旨は、「1996年9月18日に北朝鮮武装潜水艦が侵入してきたことを契機に、潜水艦が座礁したこの場に、北朝鮮の潜水艦と退役海軍戦艦を展示し、統一の念願のための体験安保意識向上を目的としてここに造成した。また、北朝鮮の潜水艦の侵入の際に犠牲になった犠牲者慰霊塔とベトナム戦争参戦記念塔設立で統一安保教育の場として作られた」ということである³⁷。言うまでもなく、「安保」と「統一」の共存する安保観光の一環として構築されたということである。そこでは、打ち破られた鉄条網が展示され、北朝鮮工作員が鉄柵を越えて脱出する場面を再現している。鉄柵は、「安保」の象徴物となっているのである。

おわりに

反共志向の色濃く残る1980年代後半の『国家安保論』では、「安全保障とは、国民が合意した体制と理想の安全を保障する努力及び装置であり、これより優先されるものはない。安全保障の問題が適用される領域はこの安全保障を威嚇する相手勢力への情報漏れを防止するための対人、対物、対空間の厳格な制限性、遮断性、秘密性、強制性を持つ」と主張されている³⁸。これまで縷々述べてきた韓国軍の安全保障に対する基本姿勢や韓国政府の支援法が投影された現代の安保観光に通じるものがあるのではないかと。つまり、安保は閉鎖的であり統制的である。そうであるからこそ、そうした状況下に置かれるとき、人々は安保意識を醸成するのである。その反面、観光は日常生活から脱した開放感や自由を満喫するものである。この相反する特性を持ち、政府の思惑と観光客の好奇心を満たす現象が安保観光に他ならない。

韓国政府は、朝鮮戦争の休戦以来、DMZ内の文化財や生態を調査してきたが、DMZを観光資源として利用しはじめたのは1960年代以降の板門店観光を嚆矢とし、その後1980年代後半から本格的に開発に乗り出した。一方、朝鮮半島の分断という状況を利用した観光は、1997年以降、地方自治体により本格的に開発されることになる。韓国政府は「安保」と「統一」教育の思惑により、また地方自治体は経済的な思惑により、観光政策を追求し、年間200万人を超える観光客をこうした観光へと集客することに成功している。しかし、例えば1999年に実現した金剛山観光が南北関係の情勢により、その実施の予断が許されない状況に置かれているのと同様に、この地域での観光も常に脆弱である。時折引き起こされる軍事境界線付近での海上における銃撃戦の際には、統一展望台などが閉鎖されることがあり、またDMZ内で銃撃戦が繰り返された時にも観光は即時に中止され、民間人統制区域で観光に携わる民間人は退去させられた。このように、安保観光は名実ともに南北朝鮮の象徴的な場所でもある。

韓国政府は自国民に対して、北朝鮮に対する安全保障上の危機感の醸成を促すいわゆる「安保」と同時に、民族の分断、国家の分裂の悲劇を再確認させ、南北統一実現の悲願の意識の醸成を促すいわゆる「統一」の側面から安保観光を推進している。これについては第2章で論じた。しかし、第3章で述べたように、現況の安保観光はより「安保」の側面に比重を置いた観光化を目指していると言うことができる。このことは、国家が観光を利用して、「安保」を重視した国民教化を行おうとする意図が投影されている結果だと言える。それは敷衍すれば、「統一」の側面における第一義は「安保」であり、統一意識を高めながらも国民の安保観を担保しようとする政府の思惑である。その一方で韓国人観光客は、北朝鮮に対する好奇心から安保観光に参加する（概ね、こうした参加動機は外国人観光客も同様である）。そうして観光後は、「安保」の意識よりも漠然とした統一への期待感や願望を強くし、民族共同体意識を強く自覚するといった「統一」の意識の方をより醸

成する。興味深いのは、可視される「軍事境界線」を越える観光形態であるか、越えない観光形態であるかの相違によって、「統一」意識の醸成は別世界としての異質感の醸成に転化するということである。その意味で言えば、DMZ や民間人統制区域を活用した安保観光は、政策としては片面的な効果しかなく、軍事境界線を越える形での、すなわち北朝鮮の協力が必至な安保観光においてこそ、政策として完徹されるという皮肉な結果を招来している。

注

- 1) DMZ とは、“Demilitarized Zone” の頭文字である。この非武装地帯設定の根拠は、1953年7月27日、朝鮮戦争の結果として調印された「朝鮮休戦協定」（正式名称は、朝鮮における軍事休戦に関する一方国際連合軍司令部総司令官と他方朝鮮人軍最高司令官および中国人民志願軍司令部との間の協定）第1条第1項などの条項による。編集代表神谷不二『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』日本国際問題研究所、1976年、508-509頁。なお、注7も参照。
- 2) 民族の分断状況を利用した観光は、「統一観光」、「安保観光」、「統一安保観光」という三つの表現が使われている。しかし、分断状況を利用した観光は国民に国家安保意識を固める側面が強いため本論文では安保観光という言葉を使いたくない。
- 3) 孫大鉉・崔錦珍「韓国における DMZ 観光のイメージ調査」『観光研究』2003年、15頁。
- 4) 外国人が韓国国内の旅行社を通じて気軽に板門店観光を楽しめるのに対して、韓国人は地域の「対共相談分室」に申請を行うことが必要であり、観光が認められるのに、2か月から6か月かかる。その上、同一世帯が共に訪問することを禁じるなどの様々な制約がある。
- 5) Roy Richard Grinker, “The ‘Real Enemy’ of the Nation: Exhibiting North Korea at the Demilitarized Zone,” *Museum Anthropology*, Volume 19 Issue 2(September 1995), pp. 31-40.
- 6) 통일부『통일백서』2003년, 1쪽 [統一部『統一白書』2003年, 1頁]。
- 7) 「軍事境界線を確立し、対抗する軍隊の間に非武装地帯を設定するため、双方の軍隊は、この線から二キロメートル後退するものとする非武装地帯は、敵対行為の再開を招くような事件の発生を防止するための緩衝地帯として設定するものである」（「朝鮮休戦協定」第1条第1項）。上掲、『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』508頁。
- 8) 함광복『DMZ 는 국경이 아니다』문학동네, 1995년, 9쪽 [ハムグァンボク『DMZ は国境に非ず』文学ドネ、1995年、9頁]。
- 9) 上掲、『朝鮮問題戦後資料（第一巻）』400頁。
- 10) 同上、401頁。
- 11) ナショナルジオグラフィック『ナショナルジオグラフィック日本版』2003年、55頁。
- 12) 玄武岩『統一コリアー東アジアの新秩序を展望する』（光文社新書）光文社、2007年の第3章「反共教育から統一教育へ」を参照。
- 13) 국방부『국방백서』2000년 (발간사) [国防部『国防白書』2000年（発刊の辞）]。
- 14) 진중규『명허리 155마일 따라가 보기』구미서관, 2002년, 271쪽 [진중영『半島のくびれ155マイルを辿ってみる』グミ書館、2002年、271頁]。
- 15) 筆者は、北朝鮮側からも板門店を訪れたことがあるが、その際にとりわけ南側に向けての写真

- 撮影に関して注意を受けたりはしなかった。この事実は一見すれば、板門店観光に際しては北朝鮮の方がより自由のように思える。しかし、韓国側から板門店を訪れる際に北側へカメラを向けることにに対して注意を受けることを勧告するなら、カメラを向けられて意に介さないか、相手側にカメラを向けることにに対して自己規制している韓国の方が自由のようにも思える。その判断は困難であるが、ともあれ観光地として開放している場所において写真撮影の可否を注意する韓国の板門店観光は、安歩観光の本質としての緊張感を醸成する意図が胚胎しているように思える。
- 16) 통일부 『통일교육지침서』 통일부, 2001년, 130쪽 [統一部 『統一教育指針書』 統一部, 2001年, 130頁]。
- 17) 同上。
- 18) 통일부 『사회 통일평가 및 발전방향 모색』 통일부, 2002년, 71쪽 [統一部 『社会統一評価及び發展方向の模索』 統一部, 2002年, 71頁]。
- 19) 以下は、大学生 DMZ ツアー感想文より抜粋した文章である。「統一の日が早く来る事を祈願する」、「自由に往来できる渡り鳥のように、笑いが満ちる新しい DMZ になることを希望する」、「一つの民族が鉄柵で分かれているのを直接見ると、分断状況が実感できた」、「一つだった民族が一度分かると一緒になることは簡単ではないと感じた」、「韓国人は皆統一を念願している。統一のためには我々が力をつけないといけない」、「強者、弱者ではなく同胞愛を持った真の強者のなるために。統一になり一つになった国として真の強者になることを念願する」、「平和と緊張が共存する DMZ。軍事警備区域ではなくグリーンツーリズム地域として探求したい気持ちである」(京畿道観光公社ホームページ : <http://www.kto.or.kr/>)。
- 20) 以下は、DMZ 周辺観光客をインタビューした主な内容である。「統一をしなければならぬと思った」、「昔は北朝鮮に対して恐怖心があったが今は交流もあって恐くない。もうすぐ統一するだろう」、「今は、北朝鮮を敵だと思わなくなった。北朝鮮は同じ民族である。早く統一することを願う」、「北朝鮮に対しての好奇心があって、北朝鮮を遠くからでも見たかった」、「どのような生活をしているのか知りたい」、「同じ民族である。今は、鉄道もつながり同じ民族という思いが沸いてくる」、「嬉しくなった。北朝鮮の出身で金剛山に行きたかったが行けなかった。ここからでも北朝鮮を見たい」、「同じ民族でありながら行けないことは切ない」、「早く統一し、北朝鮮の人と仲良く暮らしたい。北朝鮮を眺めてみてかわいそうな気分になった。近くて遠いというのは38度線のことである」、「今は、北朝鮮ではなく我が国だと思っている。早く統一してほしい北朝鮮を直接見て胸が痛かった」、「同じ民族でありながら分断されていることが悲しい」、「唯一の分断国であるため早く統一しなければならぬ」、「展望台から北朝鮮を見て同じ民族として胸が痛かった」。
- 21) 李良姬 『金剛山観光の文化人類学的研究』 2004年度広島大学国際協力研究科博士学位請求論文、107-108頁 (未刊行)。
- 22) 前掲、『統一白書』 106頁。
- 23) 김인영 · 김재환 편 『DMZ 발전적 이용과 해체』 소화, 1999년, 311쪽 [キムイニョン · キムジェハン編 『DMZ の発展的利用と解体』 小花, 1999年, 311頁]。
- 24) 박상연 『DMZ』 민음사, 1997년 [パクサンヨン 『DMZ』 民音社, 1997年]。
- 25) 국방부특별공동 조사단 『김훈중위 사망 사건조사결과』 국방부, 1999년, 1 쪽 [國防部特別共同捜査團 『キムフン中尉死亡事件調査結果』 國防部, 1999年, 1 頁]。

- 26) 北朝鮮の蔑称。1980年代までは一般的に用いられていた。
- 27) 一般的な軍隊階級の軍曹に当たる。
- 28) 臨津閣を管轄する坡州(パジュ)市運営のサイトによる(坡州市ホームページ: <http://www.paju.go.kr/main/main.tdf?a=user.index.IndexApp&c=1001>)。なお、同市が運営する日本語のホームページにも同様の記述がある(坡州市日本語ホームページ: <http://jp.paju.go.kr/>)。
- 29) 戦争記念館案内パンフレットより引用。
- 30) 小川信彦「モノの記憶と保存」荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社、2002年、61頁。
- 31) アンリ・ピエール・ジュディ・斎藤悦則訳「カタストロフィの記憶」荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社、2002年、78頁。
- 32) 『국방신문』2002년 4월 5일 [『国防新聞』2002年4月5日付]。
- 33) 『문화일보』2003년 6월 5일 [『文化日報』2003年6月5日付]。
- 34) 以下は、「脱北同胞と共にする非武装地帯観光」に参加した20代の日本人女性に対するインタビュー内容の概略である。なお、この他にも数名に対してインタビューを行ったが、紙幅の関係上、もっとも代表的な意見として採用した。「北朝鮮の現状はどんなものか、隠されるほど知りたくなる好奇心、現在盛んに報道されている拉致問題に関心を抱き、参加することを決めた。北朝鮮の印象は謎に包まれている不思議な国だというものである。韓国と北朝鮮の国境(ママ)に向かう道中には、多くの兵士が周囲に目を配らせ、緊迫した空気を察した。北朝鮮に関して具体的に説明する脱北者の姿が不思議に感じられた。日本人の私には韓国人が集団で北朝鮮へ向けて双眼鏡を覗く姿は理解できなかった。同じ民族の人が同じ民族を見る、知りたいという気持ちはどのような心持ちなのだろう」。
- 35) 板門店トラベルセンター日本語ホームページ: <http://koreadmztour.com/japanese/main.html> より引用。
- 36) 前掲、『DMZ 発展的利用と解体』310-319頁。
- 37) 江陵市公園管理事業所ホームページ: <http://www.gangneung.go.kr/main.jsp> より。
- 38) 신정현 『국가안보론』 일신사, 1988년, 41쪽 [シンジョンヒョン 『国家安保論』一進社、1988年、41頁]。

キーワード 安保観光 韓国・北朝鮮 安保 統一 DMZ 板門店

(LEE Yang Hee and FUKUHARA Yuji)